

「やまがの衆」が語る過疎化と現代——「むらの精神」に焦点をあてて

伏見優美香 文学研究科人文学専攻 文化人類学・宗教学・日本思想史専門 博士前期課程2年

問題提起 本稿は、「過疎中山間地域再生の社会シナリオ構築に向けた調査研究プロジェクト——地域住民のライフヒストリーを中心に」を題目とし、助成を受けて行った調査の報告である。

本研究は、少子高齢化が進行する静岡市内の村落を事例に取り上げ、過疎化の中で中山間地域が受けた影響を描き出し、過疎化と村落社会の関係について再考しようとしたものである。地域住民の語りとライフヒストリーの記述と考察を通じて、彼らが体験した近現代から現在にかけての様相を描く。

研究対象地とした静岡市葵区梅ヶ島は、安倍川の最上流部の急峻な山岳地に位置する。地域住民は江戸中期ごろまでは金の採掘、林業と農業を主要な生業としつつ、温泉地など観光業によっても収入を得てきた。地域住民は、自分たちが山側に住んでいるという意識を裏づけるように、彼ら自身を平野部や都市部に住む人々と対比して「やまがの衆」と自称する。彼らの現代の「むら意識」を調査することで、地域住民の生活と意識からの過疎問題の探求と現代社会の検討を行った。

方法 本研究では二種類の現地調査を行った。ひとつは、現地での史料収集である。もうひとつは、広範囲からの予備的聞き取りによる問題点の抽出と、抽出された問題点に関する集中的な聞き取り調査による資料の収集である。年中行事にも足を運び実際に様子を見聞きすると同時に、構造化／非構造化された対話式の聞き取り調査を、計12名のインフォーマントに対し行った。調査日時や内容については別記の通りである。

史料収集からは、古文書の分析を中心とした資料が多く、近年の研究や資料が乏しいことや、地域の生の声に着目した資料の数が少ないことが明らかになった。

予備的な聞き取り調査からは、地域住民の関心が主として産業、婚姻関係、交通環境、自治組織、年中行事、観光などにあることが判明したため、それらの変遷と地域住民の語り資料を重点的に収集した。これらの項目は相互に関連しているが、本論文では特に、自治組織、年中行事、観光についての項目を、それぞれ「地域を内外からみる切り口」、「地域内の関係と文化への価値観をみる切り口」、「住民たち自身が置かれた状況をみる切り口」の観点とし、地域住民の「むら意識」を分析した。

考察と結論 対象地域では、かつての過疎研究において予測されてきた住民やイエの個別化と、村落研究において提唱されてきた「むら」を貫く「共通の意識」が、形を変え、依然として併存していることが明らかにされた。地域住民は、新自由主義的な資本主義社会と貨幣経済の影響を確実に受けつつも、価値観や生活を変化させながら「むら意識」を再生産させている。かつての共同体論や共同体解体論、都市と村落を対置的にとらえる見方ではこの動きをとらえることは困難である。両者が混在していく新たな見方への転換が必要と結論づけられる。

補足資料

調査日時 (個人情報のため聞き取り対象の名称は伏せる)

2016/2/22・25: 初午祭り稽古参与観察

2016/3/1: 初午祭り稽古参与観察、新田地区フィールドワーク

2016/3/10・11: 初午祭り参与観察

2016/8/13: 盆踊り参与観察

2016/9/21: 聞き取り調査

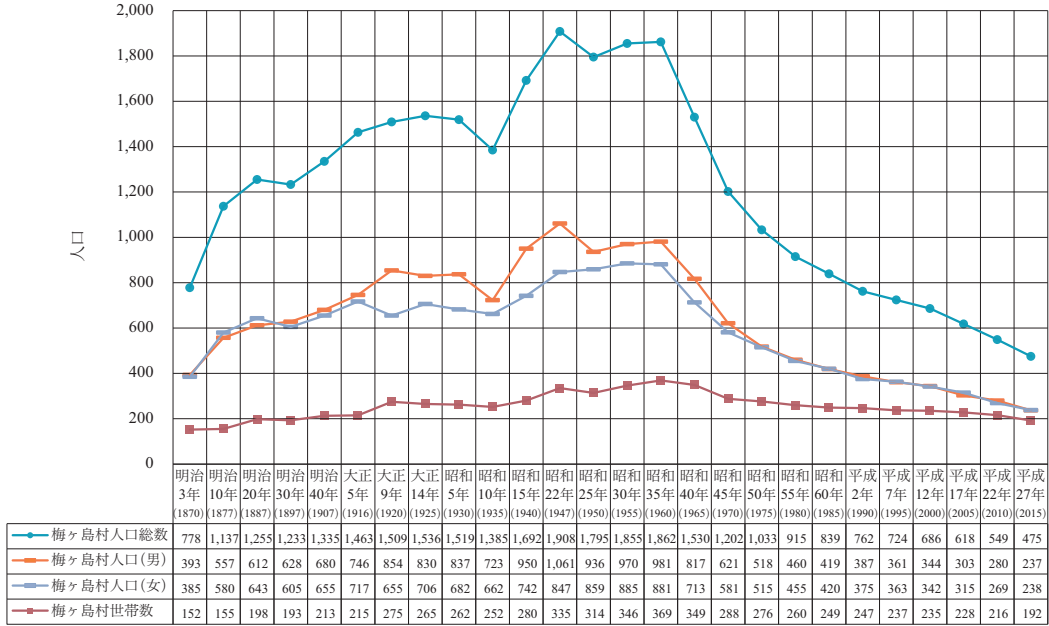
2016/9/23: 聞き取り調査、花火大会参与観察

2016/10/13: 聞き取り調査

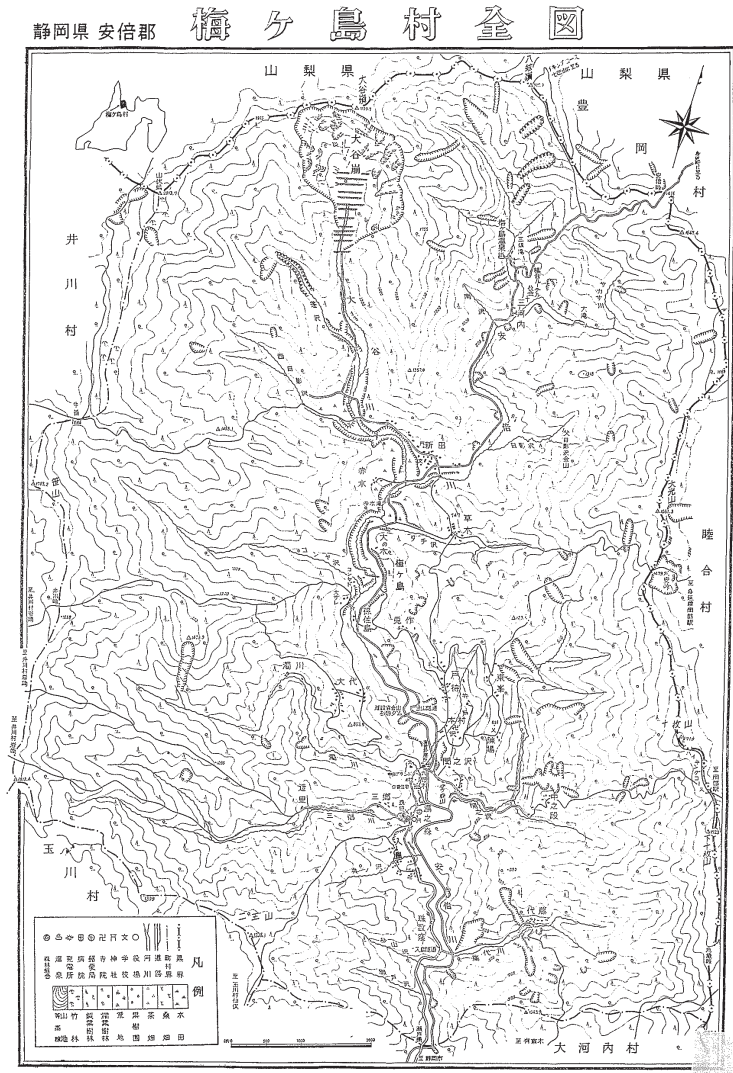
2016/10/18: 聞き取り調査

2016/11/14: 聞き取り調査

2016/11/15: 聞き取り調査



人口動態 (国勢調査および『梅ヶ島村誌』を参考に筆者作成)



梅ヶ島地図 (梅ヶ島村教育委員会、1968、『梅ヶ島村誌』梅ヶ島村役場より引用)